ニッケル・コバルト系スクラップ主力

メタルドゥ・2nd物流センター

特金スクラップの国内市場が動揺している。ニッケル相場の急落と安値更新によって売り意欲が低下し、市中発生が冷え込み。もとより相場に左右されやすい業界だが、現物確保の正念場を迎えて、集荷競争は一層激しくなりそうな気配だ。こうした現在の取り巻く環境と合わせて、業界流通大手のメタルドゥ（本社＝大阪市西区）の主力ヤードである2nd物流センター（神戸市中央区）を取材した。

5日検収で競争に挑む

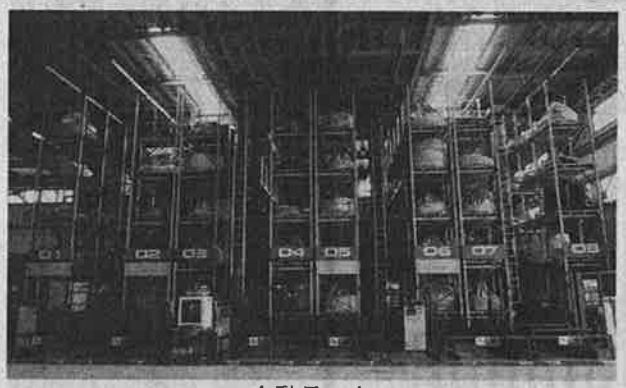
神戸港内にあるポートアイランドは、国内初の大規模な人工島で知られる。景色が良く、北の神戸市街の背後にそびえる六甲山系は、四季の風光の移ろいを見せてくれる。大学や企業の研究機関も多く集まり、関西エリアで盛んな先端医療技術の産学連携拠点としても知られるようになった。

その南部の一角にメタルドゥが2nd物流センターを開設したのは、リーマン・ショック渦中の2009年3月のこと。投資のタイミングを危ぶむ声もあったが、今や1st（大阪市此花区）とともにフル稼働に近い。同社は前期決算（2015年2月期）で、所期の目標だった海外仕入れ比率50%（金額ベース）を達成したが、それを支えたのも2ndだった。なお、2つのヤードは品目・鉱種別に使い分け、1stでは電池スクラップ、チタン、タンタルなど、この2ndではニッケルとコバルト系を主に扱う。

延べ床面積約6600平方㍍の倉庫建屋の出入り口は、荷卸し場、検収場、置き場、出荷場までが一方通行。モノの動きを整流化させることで、検収スピードのアップを図っている。同社の検収は5日以内を基本方針としており、検収を担当する1人ずつが携帯型の分析計を持っている。山頬敏彦社長は「この業界の永遠の課題が相場リスク。それを分散するために、検収から値決めまでをいかに早くスムーズに行うかがポイントだ」と話す。

特金スクラップは送り手の伝票により、発生元と成分がおおむね明らかだが、それでも異材が混じっているケースは多く、それを見分けるのは分析計だけではなく知識と経験が必要。分析計のない時代は形状や火花の色、磁石・酸の反応などでアナログな方法で識別していたというが、間違いはほとんどなかったという。また、検収が終わるまでの荷物はあくまで「預かり物」なので、異材混入を把握していなかった顧客とも納得して値決めができる、誠意ある検収報告書作りも求められる。

検収を終えた荷物は奥の置き場に移動するが、このヤードの収容能力は2000㍍のうち、30%の600㍍は5段積みの立体自動ラックが占める。これは開設当時からの目玉設備で、1・5㍍パレットにフレコンパック、ドラム缶、地金などを自由に載せることができる。自動ラックは製品流通ではよく見られるが、スクラップ業界では珍しい。しかし、「出し入れで少なくとも2人分の省人化はできるし、商品を顧客にすぐ見てもらえるのが便利」（片山俊介取締役）と、多品種の特金スクラップの管理には適した設備と言える。



自動ラック

これら特金スクラップのロットの目安は3㍍とされる。これは需要家であるステンレスメーカー側の受け入れロットと関係があるらしいが、3㍍に満たないロットでは取引価格が安くなり、ロットが大きいほど高い。大ロットで値引きする製品とは逆の世界なのだ。

◇◇◇

同社は11年に東京にヤードを進出し、13年には早くも移転拡張を遂げるなど、商圏拡大の実績を上げてきた。その一方でスクラップの高付加価値化も図り、14年からチタンやスーパーアロイ（超合金のセカンダリー（二級品）の加工事業も1st物流センターで始めた。割安なセカンダリー市場は海外では一般的だが、国内ではまだ少ない。今年に入り、アリゲーターシャーとショットブラストを新規導入して事業を強化している。

特金スクラップは、鉄・ステンレス・銅・アルミなどのスクラップ業界と比べて歴史はまだ浅く、可能性を秘めた業界だと言える。近年は日本国内で新会社が設立され、スーパーアロイを内製化する機運も上がってきた。欧米のように、安価原料のスクラップをフル活用する製造レベルには至っていないが、将来は特金スクラップの需要が高まるかもしれない。

一方で、そのスーパーアロイやチタン合金の加工分野では、海外の材料メーカーに発生スクラップを直接返すリターン制度も徐々に構築されつつある。そうなると、市中で流通するスクラップ量は必然的に減少するが、「この危機感を力に換えて、設備投資や教育で欧米並みのレベルを目指したい」（山頬社長）と、特金の可能性を前向きに追求していく構えだ。（桐山　太志）

日刊産業新聞 15.7.16

2015年7月16日付　産業新聞掲載